

『パスカルーのーパンセ』校訂版の全面的刷新； どんな理由で？ 何を目指して？

アラン・カンチオン（川上紘史訳）

今回の『『パンセ』の』¹編集の刷新の理由、そしてそこから期待される効果を説明するために、『パスカルーのーパンセ』(*Pensées-de-Pascal*)²史上のいくつかの大きな節目について簡単に触れておかねばならない。1662年、ブレーズ・パスカルの死の際に、彼の近親者は、そのすべて、あるいは大部分が自筆の手書きの〔書き込みがなされている〕紙片を大量に見つけた。それらの紙片はのちに原稿集として貼り付けられ〔まとめられ〕ることになる³。パスカルの近親者たちはその写本をいくつか作らせた。そのうちの二つが保管された。それらの写本は『パンセ』肉筆原稿集〔以下「肉筆原稿集」と記す〕にあるほとんどすべてのパンセ⁴を含んでいるのみならず、肉筆原稿集にはないいくつかのパンセも含んでいる。1669年と1670年に、パスカルの近親者たちは、パリで、出版社ギヨーム・デプレから、『死後書類の中から見出された宗教および他の若干の主題に関するパスカル氏の断想』(*Pensées de M. Pascal sur la religion et sur quelques autres sujets, qui ont été trouvées après sa mort parmi ses papiers*)の初めての版〔以下「ポール・ロワイヤル版」と記す〕を出版する。

¹ 【訳註】以下本文・脚注中の亀甲かっこ（〔 〕）は訳者による補い。

² 【訳註】カンチオンによると、パスカルの『パンセ』のすべての版（カンチオン自身の版も含む）は、作品に全面的に操作を加えたものである。そのため、どの版も、「その著者の新たな表現」（カンチオンは著者の「ペルソナ」と呼んでいる）であり、そのようにして著者が作品の中に包含されてしまう。著者、作品、編集間のこの関係性を、『パスカルーのーパンセ』と言う表現は表している。

³ 一般に「『パンセ』肉筆原稿集」(Bibliothèque Nationale de France, cote f.f. 9202; <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b52504189f/fl.item>)と呼ばれる原稿集はパスカルの自筆のパンセが書き付けられた紙片を保存している。この原稿集には相当数の他筆の〔hétérographe〕（あるいは、言い方を変えれば、他の人の手による〔allographe〕）パンセも存在する。ここで他筆と我々が呼んでいるのは単にパスカルの手によるものではないだけでなく、〔パスカルの〕自筆の修正もなされていないパンセのことである。自筆の修正の存在は他筆で書かれたものを著者自身の手によって認証し、自筆のカテゴリーへと移す。他筆のパンセ（自筆による修正のない）が著者の存命中から作られており、著者の死後彼の紙片の中から見つけられたのか、それとも、友人に貸された紙片、あるいは与えられた紙片に書かれていた自筆のパンセの代わりとなるために著者の死後に作られたのかを確実に知ることはできない。

⁴ 【訳註】「『パンセ』」はパスカルの折々の考えを集成した断想集の題名であるが、他方、断想集を構成するそれぞれの文章も「パンセ pensée」と呼ばれる。（「凡例」『パンセ（上）』塩川徹也訳、岩波書店《岩波文庫》、2016、12頁。）訳において、著作の『パンセ』は『』をつけて、文章はカッコなしで記している。

1842-1844 年の文献学的革新まで、編者たちはポール・ロワイヤル版が与えたテキストを再利用していた。だが同時に彼らは〔ポール・ロワイヤル版の〕プランを一変させ、コンドルセとヴォルテールが 1776-1778 年に行ったように、パスカルの近親者の仕事を激しく批判していた。また、いくつかの版は写本に見出される未発表のテキストを付け加えた。

二つの文献学的革命

1842 年に、アカデミー・フランセーズがブレイズ・パスカルに強い関心を寄せる。まずパスカルの賞賛演説のコンクールが行われた。二人の受賞者のうちの一人、アルマン・プロスペル・フォージェールは、二年後『パスカルーのーパンセ』の文献学的時代の最初の編者となる。ついでヴィクトル・クザンの『報告⁵』が到来する。この『報告』は、ポール・ロワイヤル版が大きく改ざんされていること、単にいくつかの宗教的論争を避けるために書き直されただけでなく、著者が紙片に残した語句のレベルで修正されていることを示した。この報告において、クザンはアカデミーの同僚たちに、セーヌ川を渡り、リシュリュー通りの王立図書館に行って、パスカルの手稿原稿を調べるよう勧めている。クザン自身は〔手稿原稿ではなく、〕特に写本を参照した可能性が非常に高い。しかしながら、それは彼の『報告』の影響に比べれば些細なことだった。当時のある批評家が述べたように、この報告は『パスカルーのーパンセ』を、依然として図書館の棚にあり続けているにも関わらず、そこから消し去ってしまったのだ⁶。この状況は、しかしながら、二年間しか続かなかった。フォージェールが極めて迅速にかつ見事に仕事をし、完全に新しい版が 1844 年にはもう刊行されたからである。

その後、数々の版が続く。それらは少しずつ、新しく、より正確な読みをもたらした。そして、それらの版は、たいていの場合、パスカルが出版を企てていたと言われている本において準備されていたプランおよび秩序を見出す、さらに言えば再発見することを主たる野望としていた。しかしながら、それらの版のうちただ一つが、十九世紀末から二十世紀中葉までの半世紀以上にわたり極めて支配的となるほどに認められる。それが 1897 年に最初に刊行されたレオン・ブランシュヴィックの版だった。ブランシュヴィックは後に、1904 年から「フランス大作家叢書」シリーズのパスカル全集の偉大な版を刊行する。〔1897 年〕の『パスカルーのーパンセ』の版は、いわば、パスカルにこの尊

⁵ 【訳註】正式なタイトルは『パスカル『パンセ』新版の必要性について、アカデミー・フランセーズへの報告』。

⁶ 【訳註】『パンセ』という書籍としては棚にあるけれども、あまりに改ざんされているために読む価値はないと知らしめた、ということ。

厳〔＝パスカルの哲学者としての価値〕を否認したヴィクトル・クザンの『報告』から、まさに哲学教授ブランシュヴィックの版に至るまで、十九世紀の間中ずっと行われた激しい論争において、徐々に作り上げられた哲学者としてのブレーズ・パスカルを認めるものだった⁷。この版が自筆原稿の解読において数々の発展をもたらしたことは強調しなくてはならない。しかしながら、この版に成功をもたらしたのはそのことではなく、その整理の仕方の刷新という、「哲学的な」性格だった。この版が実際に示していたプランは、企てられていたと仮定されている著作のプランの復元を目指すのではなく、その著者の思考の論理を、十四のセクションにわけて、再発見することを目指すというものだった⁸。これらの大きなセクションは「演劇」「雄弁」「想像力」「デカルト」「理性」「感覚」のような章にさらに再分割されていた。主題を扱うパンセの豊かさに応じて長短はあれども、この再編成は、この本を哲学の講義の枠組みにおいて大いに便利なものとし、またそれほどではないにしても、レトリックそして文学の講義の枠組みにおいても便利なものとした。この点は、今日ではおそらく目立たなくなっている、その高度な文献学的厳密さ⁹と共に、この版の強みであり、そしてそれこそが、登場してから百年以上経つ今でも、この版が書店で手に入り続けている理由でもある。

しかしながら、今日、中心的な版は、紛れもなくラフュマ版と、その原則を受け入れてその後作成された二つの版、セリエ版とル・ゲルン版だ。2016年の文学のアグレガシオン〔大学教授資格〕試験で底本に選ばれたセリエ版は、さまざまな出版社からさまざまなフォーマットで出版されており、昨年（2023年）ブーカン叢書に収録されたパスカル著作集の最新版も含めてこの版に従っている。ル・ゲルン版についていうと、これは名誉あるプレイアッド叢書に採用されている。

1948年にその最初のバージョンが出版されたルイ・ラフュマの業績は文献学的な第二の刷新とみなすに値する。ラフュマ、セリエ、ル・ゲルンの版の違いには踏み込まず、これらの版を結びつけるものに注目しよう。これらの版は、三つとも、ラフュマによって生み出された原則に従っている。それは、著者の死後まもなく作成された二つの写本のどちらかの順序に従う、というものだ。これら二つの写本では、一部のパンセ、全体

⁷ フェリックス・バランシー（Félix Barancy）の近年の博士論文（2022年12月、出版準備中）*La « carrière scolaire » de Blaise Pascal. Politique des auteurs et canonisation philosophique en France au XIXe siècle (1809-1914)*を参照

⁸ 参考までに順番をあげておく。「Esprit de géométrie, esprit de finesse」/ La connaissance de l'homme / Contre les incrédules / Les « moyens de croire » / Les lois / Dignité de la pensée / La doctrine chrétienne / Ambiguïté des « fondements » de la religion / Les religions / Les figuratifs / Les Prophéties / Preuves de Jésus-Christ / La règle des miracles / Les divisions de l'Église.

⁹ 特に、自筆原稿とそうでないものを入念に指摘していた。本論の続きを見よ。

の半分弱のパンセを三十弱の区分に分類し、それらの区分を冒頭においている。その区分のタイトルのリストが、それらに先行している。

ラフュマのスタイルに従う諸版は次の仮説にもとづいている。それは、これらの区分が著者自身によって構成され、著者の死後そのまま見出された「リアス」(liasse)を再現、忠実に再現している、という仮説である。「リアス」とは、糸と針を使った、紙の分類形式の一つで、〔十七世紀〕当時には一般的なものだ。紙の角に小さな穴を開けて、そこに糸を通してゆく。そして同じようにして紙を次々と足してゆく。リアスは結び目によって閉じられ、また開かれ、足りないところが補充され、時と共に必要に応じて再編成された。

今、私には、この支配的な編集上の伝統と決別し、『パスカルーのーパンセ』という著者の死後展開されてきた存在の新たな局面を開くことが望ましいように思われた。それは、異なった二つの秩序に属する相補的な理由による。

全面的刷新へと導く理由

1) 文献学的理由

私がこの理由から説明するのは、それが、私がなすべきだと信じていた編集の刷新の行動を正当化するからである。

リアスの仮説は根拠薄弱であるように私には思われる。この仮説は何よりもまずポール・ロワイヤル版の序文にある相補的な二つの主張に基づいている。ところで、ヴィクトル・クザンの『報告』以来周知の通り、この序文を文字通りに受け取ることはできない。この序文が紹介するポール・ロワイヤル版は、「見出されたまま、何も付け加えたりも変えたりもしていない」パンセを提示している、とこの序文は言っているのだから。

この序文において、「紐でいくつかのリアスに綴じられながらも、いかなる秩序も連続性もない、ひとまとまりの〔紙片群〕が発見された」、そして「まず、紙片群があったまま、発見当時の混沌のままにそれらを複写させた」と言われている。故に、無秩序、「混沌」があった。そしてその無秩序は、複写行為によって、諸版によって尊重されるより前に、事実上一つの秩序に変えられてしまったのだ。写本の構成において、〔写本〕冒頭に見出される章だてではこれらの「リアス」を正しく復元している、と示そうとラフュマは試みた。しかしながら、周知の通り、自筆のリアスのリストは存在せず、写本の中にある、章の二つのリストに「リアスのリスト」とタイトルが付けられているわけでもない。そもそも、ラフュマ自身この章のリストを公表してはいない。

重大な不確実性が、これらの章と著者自身によって構成された不確定なリアス群の間の関係の周りに漂っている。そして、この主題に関して、仮説的な構成の段階を越えることはできない¹⁰。

私たちが念入りに指摘したように、ポール・ロワイヤル版の序文は事実から距離をおいている。この序文はどんな場合にも出来事のまさしく正確な証言と受け止めるべきではなく、二つの目的をもった発話行為とみなすべきだ。一つめの目的は、先ほど見たように、ポール・ロワイヤル版を、読者の信頼に値する刊行物だと示すことである。二つめは、後世の人々に働きかけることだ。ポール・ロワイヤル版の序文において、単に「忠実な写本を作らせた」と明言されているだけではなく、「すべてを出版できなかった」とも言われている。長い補足説明なしには理解できないために出版できなかったパンセがある、と具体例とともに示したのだ。そのメッセージは明白だ。出版されなかったパンセがあるが、それは保存されている。このメッセージはよく理解されたようだ。というのも、すぐさまこれらの記録文書から未刊行のパンセがいくつも発表されたのだ。数年後、パスカルの姉ジルベルトに帰せられる別の著作、『パスカル氏の生涯』の刊行が『パスカルーのーパンセ』の後の運命の掌握と受容の先行決定を完遂することとなった。パスカルの家族と最初の編者たちが行った『パンセ』に対するこの掌握が依然として極めて強烈に残り続けているということは指摘しておくべきだろう。なぜなら、大抵の場合〔『パンセ』の〕諸版はこの『生涯』を、場合によっては〔ポール・ロワイヤル版の〕序文とともに再版している。のみならず、ラフュマによる転換以来、『パンセ』諸版は、写本がなしたように『パンセ』を形作っている。さらにそれを超えて、名高いプレイアッド叢書に収録されている、ミシェル・ル・ゲルンによる『パスカルーのーパンセ』の最新版は1669-1670年の変造版を再版するにまで至っている。

反対に、これらの仮説的な構成とこの掌握の前に戻り、私たちが自由に使えるありのままの肉筆原稿のみを基盤とするのは適切である。肉筆原稿は、一方で、パスカルの自筆の複写として、さらにはパスカルの口述のもとに記されたものとして提示されていた他筆の文字の筆致を示す。他方で、それは起動相の自筆の文字の筆致を示す。もっとも自筆の文字の筆致はあまりにも完成状態からかけ離れているので、単にそのまま、それ自体ですでに恐るべき編集上の問題を引き起こしている。

¹⁰ これらの構成に関して、最も完璧なように私たちに思われるものを挙げる。Jean Mesnard, « L'ordre dans les Pensées », *Dix-septième siècle*, 2013/4 n° 261, p. 575-602. <https://doi.org/10.3917/dss.134.0575>.

2) 本質的に編集上の理由

ルイ・ラフュマは、パスカルの残した紙片に見出される、パスカルの死の時点の秩序だと彼が思ったものを発見、公表することで、〔パスカルの未完の著作の〕プランに関する果てしのない問題を解決したと思っていた。この点について、これほど不確かなものはないと私たちが考えている理由は、先ほど述べた通りだ。また、もしそうだとすると、もしこの秩序が写本によって伝えられたプランを、実際に、忠実に復元しているとして、編集上の価値はたいしたものではない。それは、実のところ、書いたことの公的な伝達、出版を目指して、著者によって練り上げられたプランでは全くない。ラフュマの仮説に従っても、せいぜいのところ、将来書くつもりの本のための、個人的な、一時的な分類でしかない。パンセは、さまざまな章だてやタイトル、ある種の秩序、読みやすいよう考案された展開の中にあるのではない。

パスカルの近親者の働きによって誘導された伝統に関して、私が行なっている考証の必然的な帰結として、私は、自筆原稿と他筆原稿の間に通常打ち立てられている関係についても再検討するに至った。この関係は、問題にされないほどに強固なものとなっている。習慣によって、言い換えればジャン・メナールが「パスカラン」（パスカルの近親者）と名付けた人々に対するパスカル研究者のある種の愛着によって、他筆原稿は完全に信頼できるものとみなされてきた。この信頼はあまりに大きく、時には自筆原稿のパンセよりも他筆原稿のパンセに価値が与えられるほどだ¹¹。自筆原稿が残されており、かつそれが著者によって全く出版されていないにも関わらず、自筆原稿と他筆原稿の間で示されるべき違いが忘却されている。パスカル研究のためにこの編集上の異常事態と決別する時が来たのだ¹²。

いくつかのパンセは写本によってしか知られていない。そして、二つの写本の間の一致は、間違いがないという保証でもなければ、改ざんされていないという保証でもない。そもそも、自筆原稿が貼り付けられた肉筆原稿集もまた、大量の他筆原稿を含んでいる。同様に、写本において、あるパンセが一つ、あるいはいくつもの、自筆原稿にはない言葉を含んでいることがありうる。〔しかし、これまでの『パンセ』の版は〕このことから写本の改ざんを結論づけることもしなければ、評価を下さず単にこの違いに言及する

¹¹ A167〔セリエ版（以下 S）662-ラフュマ版（以下 L）432-ブランシュヴィック版（以下 B）194bis〕はセリエ版において H12〔S681-L427-B194〕の「準備ノート」とみなされている。【訳註】A, H はカンチオン版『パンセ』の断章記号。A は「自筆のパンセ」（*Pensées Autographes*）、H は「他筆のパンセ」（*Pensées Hétérographes*）を指す。

¹² このことはある著者の名に応じて変動される著作群のあり方の制度の内部で理解される（この点について本論の続きを見よ）。

こともしなかった。これまでの版は、伝統的にそして大抵の場合、この差異から、自筆原稿に見つからないものを写本が忠実に保存しているのだと結論してきたのだ。

最後に一つ付け加えよう。自筆原稿固有の特徴に注目する以上、可能な限り、元の句読法を尊重することが必要だった。この尊重は、機械的な形でも断定的な形でも実現できない、と言わねばならない。これは繊細な仕事なのだ。しばしば、疑念が残る。とりわけ、いくつかの語尾の「筆跡」(*ductus*)¹³の終わり〔に関する疑念が残る〕。たとえば「e」をコンマ〔«,»〕と取り違えかねないのだ¹⁴。加えて、元の句読法の不足を補い、時には置き換えねばならないこともある。これまでの編者がなしてきたのとは反対に、私は可能な限り句読法を置き換えないようにした。ただ、句読法が、あまりにも私たちの今日の用法に反しているとき、あるいはそのパンセが執筆された時の用法から見て、間違っているとき〔に限って置き換えたのだ。〕私はこの置き換えを常に注で指摘した。二種類の句読法の違いは印刷方法によって区別されている。〔肉筆原稿の〕オリジナルの句読法を灰色で、付け加えた句読法を黒で記した。

先行するどの版よりも〔肉筆原稿に〕忠実なこの新しい句読法は、通常パスカルのものとなみなされているものとは異なるディスクール〔*discours*, 言説〕を見せるだろう。〔それは、〕よりつながりがあり、不調和な点が少なく、豊穡なリズムをもった、生まれたばかりのパンセのディスクール、多くの場合穏やかな揺らぎの中に、エクリチュール〔*écriture*, 書くこと、書き方〕の働きによって、文章への道を開く方法を見つけるディスクール〔だ。〕私たちは、レトリック的な構成によって特徴付けられ、読者に無理強いしようとする雄弁のリズムが見られる、あの短く切られた散文から距離を取る。諸版は、コンマで十分なところにピリオド〔«.»〕を加え、無闇にコンマをピリオドに置き換えることで、この句読法、このリズム、このディスクールの本性を、変更しようとしてきた。(私たちはその二つの例を以下で目にするだろう)。

このディスクールの不安定さへの尊重

私がこの新版で導入した、パスカル研究の伝統からのこれら三つの変更点は、どれも同じ方向を向いている。それは、『パスカルのーパンセ』という未完のディスクールがもつ不安定さへの最大限の尊重である。私は自筆原稿の句読法を、確認可能な限り尊

¹³ 【訳註】「筆跡」*tracé*、「線」*trait* の意味。

¹⁴ 例えば p. 73, note 3, p. 100 note 3, p. 208 notes 2 et 3, p. 209 note 1 を見よ〔ここに挙げられているのはすべてアラン・カンチオン版『パンセ』のページ・註番号〕。

重し、パスカルの手によるものとそうでないものを区別した。パスカルの近親者の手によって、忍びこまされたかもしれない変更をこのディスクールに帰さないためにである。

『パンセ』の〕提示された一プランを決定版と名付けることで、読者諸兄姉に次の印象を与えないよう私は心がけた。それは、ある確かな秩序が発見、あるいは再発見された。この秩序が、満たすことのできない空白のない、首尾一貫したディスクールの総体の構成を可能にした、という印象である。

この新版が提示するプランは、厳密に言えば、ある数の「テーマ群」(*themata*)¹⁵を通じた読書の道のみでしかない。パスカルが残したエクリ〔écrit, 書かれたもの〕を、ポール・ロワイヤルのカトリック主義的護教論のプランの代わりとしようとする構成に従わせるのでもなければ、(ブランシュヴィック版のように)著者の思考の論理的なつながりを復元しようとする構成に従わせるのでもない。そのような復元が可能である、と仮定することが、私たちに言わせれば、パスカルが残したエクリの未完という特異性を否認することだ。私たちのパンセの分類作業は、ただこれら散乱したエクリを通じて導くことだけを目指す。タイトルはこれらのエクリそのものから抜き出された。それぞれの「テーマ群」の内部で、私はもっとも直接理解しやすいパンセからはじめ、ついで段階的に発展させた。同時に、随所で興味を喚起し直すことができる断絶をいくつかもたらしした。

この新しい版がもたらした変化を問うならば、それはブランシュヴィック版よりもいっそうラフマ式の諸版〔セリエ版、ル・ゲルン版〕に関わる変化であることに気づくだろう。このことは二つの点から言える。一つは、明らかに、私たちの新しい版のプランが、その原則から、ブランシュヴィック版のプランに近いということ。もう一つは、ブランシュヴィック版は、『パンセ』を読むための前書き」(l'Avertissement pour la lecture des *Pensées*)の冒頭に位置する長いパラグラフで説明された、極めて具体的な基準をもって、「断章の原産地証明書」(Le certificat d'origine du fragment)と呼ばれるものを提示し、自筆原稿と他筆原稿の違いを十分にはっきりと印づけていることだ。この基準化された「証明書」はそれぞれのパンセの冒頭に置かれている。それにより、その断章が肉筆原稿集に由来するのか、写本の一つに由来するのか、印刷物に由来するのか知ることができる。そして、肉筆原稿集に由来するパンセに関しては、それが全面的に、あるいは部分的に、自筆なのか他筆なのかも知ることができる。

¹⁵ ジェラルド・ホルトンから借用し、少々自由に当てはめた名称。【訳註】カンチオンによると、この「テーマ群」は単に概念的なものだけを指すのではなく、起動相的なものでもある。そこには「印象」*impression*、「感覚」*sensation*、「図式」*schème* も含まれる。

しかしながらブランシュヴィック版は自筆原稿と他筆原稿を混ぜたままだった。それゆえ、両者の価値にさほど違いがないかのようにしてしまっている。

書き記された発話行為の存在様態が著者の名から切り離されているとすれば、そしてこれらのエクリを一つの全体として扱うことが許されるのは、単にそれらが三つの肉筆原稿、小さな紙片が貼り付けられている〔肉筆原稿集〕と、明白にそこに見出されるエクリの写しである二つの〔写本〕にこれらのエクリがまとまっているからだとみなされるのだとすれば、別様に行動する理由は何もないだろう。ところが、これらの肉筆原稿はそうにみなされるべきではない。なぜなら、最初から、それらの存在を保証するもの、数世紀にわたってそれらの作成と保存を正当化してきたものは、まさにこれらの肉筆原稿が、長きにわたって大作家と讃えられてきた一人の人物に結びついているために、それらは卓越した高い価値を授けられたエクリの全体である、とみなされてきたことそれ自体だからだ。さらに言えば、これらすべてのエクリの中で、いくつかはその著者自身の手によるものであり、それゆえ残され、今日にまで至った。しかしそれらも、その著者自身によって出版されてはいないのだ。そして、おそらくは、せいぜい将来の本の下書きでしかなかったものが、この大作家の残したすべてなのだ。ところで、エクリは一人の著者に結びつけられるというエクリの存在の制度において、当初から、皆の興味を引いたのは、この著者が書いたこと、著者が書くことと言わんとしたこと、そして著者がエクリに凝らした技巧だった。その結果、この制度の中で、自筆原稿と他筆原稿を無差別に受け入れることは、書字生の誤り、さらには改ざんを無批判に受け入れることとなった。その上、秘書に口述するパスカルという寓話が、他筆原稿を自筆原稿同様に受け入れるよう促している。逆説的なことに、たとえ、肉筆原稿集に含まれる他筆原稿のいくつかは、口述筆記として本当に受け入れられているにせよ、それらが著者の自筆による訂正を受けていない場合にも、著者の口が言ったと仮定されることをこの手は見事に書いた〔＝著者が言ったかどうか保証のないことを書いている〕、とは言われないのだ。

次のことを付け加えておかねばならない。あらゆる編集活動は、(慣用表現にいう)「学術的」編集者のみならず、出版社、印刷業者といった、多くの人々を巻き込んだ他筆活動であることを私は十分に自覚している。しかしながら、二種類の他筆が同じ水準に置かれるべきではない。第一の他筆は三つの偉大な肉筆原稿の作成の際のものである。これは自筆原稿と他筆原稿を混同させること、すなわち自筆原稿の中に他筆原稿を挿入することを目指している。第二の他筆は編集上の作業の際のものだ。ヴィクトル・クザンの『報告』以来、この他筆は元々の手書き原稿から区別され続けている。実際、版の

正確さを検査し、その他筆の仕事の豊かさ（断片の整理、パンセの範囲の確定、句読法、提示された読み方、選ばれたプラン）を測定することは常に可能であり続ける。先ほども述べたとおり、私はできる限りこの介入の度合いを減らし、自筆原稿と他筆原稿に元からあった混沌と格闘することを目指した。そのうえ、「ガリカ」〔フランス国立図書館の電子図書館〕のサイトにおける肉筆原稿集と二つの写本のオンライン化、およびマルシェッス社〔カンチオン版『パンセ』の出版社〕の並外れて綿密な仕事のおかげで、読者は、私たちの版を用いて、それぞれのパンセを一つ一つ、肉筆原稿で読むことが可能となった¹⁶。

以下では、自筆原稿と他筆原稿の違いと句読法に関する読み方の変更のいくつかの例を簡単に見ておこう。

他筆の存在に関していえば、例えば、有名な「この無限の諸空間の永遠の沈黙が私を恐怖させる」（C. H1 ; S. 233-L201-B206）は他筆である。このことは話をすっかり変えてしまう。そこで一人称で話している語り手の道程の問題は絶えず取り上げられてきた。「パスカル自身が自分の個人的な経験を語っているのか。あるいは不信仰者に語らせているのか？」この問題から距離をとり、他筆の幕の裏におかねばならない。確かに、この有名な命題において誰が語っているのか言明するのは困難である。しかし、そもそも、誰がそれを書いたのか、そしてこのフレーズと、前もって『パスカルのーパンセ』の著者によって書かれていたかもしれない別のフレーズとの関係がどのようなものなのかを知ることは不可能である。私たちはここで、著者の名前に応じて変動するテキストの制度において、自筆原稿と他筆原稿を区別しないとき生じかねない、恐るべき価値の転倒について強調したい。それは、ある自筆のパンセを、他筆のパンセによって乗り越えられ、置き換えられたものとして抹消されたものとして諸版が提示する時に生じる。その範例的なケースが C. A167 (S662-L432-B194 *bis, ter*) と C. H12 (S681-L427-B194) である¹⁷。

句読法に関して、誇張なしに、諸版の一般的な傾向はパスカルの自筆のディスクールのカリカチュアを公然と生み出すことだったと言わねばならない。自筆のパンセは多量にも激しくも句読点を打っていない。最も頻繁に用いられる記号はカンマである。それゆえ、時には、単なるピリオドあるいはクエスチョンマークで置き換える必要がある¹⁸。

¹⁶ 〔カンチオン版『パンセ』〕全体を通して、傍注におかれている、典拠となった肉筆原稿のページへの参照のおかげである。

¹⁷ 再び〔カンチオン版『パンセ』〕の序文 p. 26-27 の論証を参照。

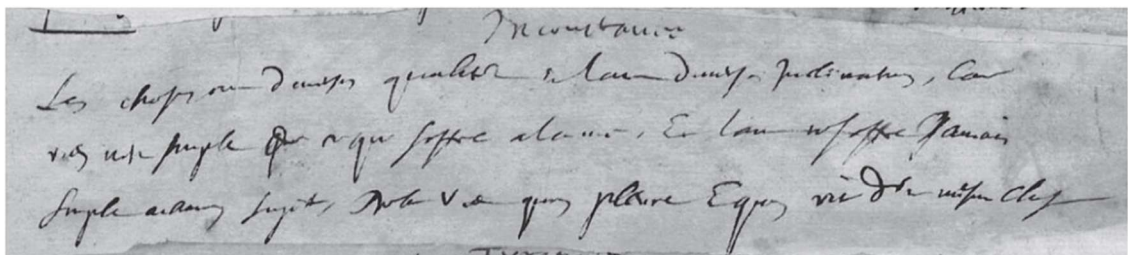
¹⁸ その場合、私たちは〔＝カンチオン版『パンセ』では〕そのことを脚注で示している。

これらのカンマは思考の歩み、加筆と掘り下げによる迅速な思考の発展を印づけている。極めて特別なこのディスクールは、エクリチュールにおいて自らの道を探求するパンセの、しばしば起動相的な、働きとして自筆の筆跡の中に見るべきもの、読み取るべきものとして自らを提示している。だが諸版はこのディスクールの代わりに、読者に、書式にかなって完成した雄弁の断片を提示している。例えば、以下のように、(「sujet」の後の)カンマがセリエ版では結句としてのレトリック的效果を生み出すためにピリオドに置き換えられている。(カンチオン版、肉筆原稿集、セリエ版の順で並べている。)

A138
R 67

Inconstance

Les choses ont diverses qualités et l'âme diverses inclinations, car rien n'est simple de ce qui s'offre à l'âme, et l'âme ne s'offre jamais simple à aucun sujet, de là vient qu'on pleure et qu'on rit d'une même chose.



87

Inconstance.

Les choses ont diverses qualités et l'âme diverses inclinations, car rien n'est simple de ce qui s'offre à l'âme, et l'âme ne s'offre jamais simple à aucun sujet. De là vient qu'on pleure et qu'on rit d'une même chose¹.

またあるいは、いくつかの箇所では自筆原稿では句読点が表れていない場合、一般的な句読法を尊重し、可能な限りカンマの使用を優先しなければならないように私には思われる。(カンチオン版、肉筆原稿集、セリエ版の順で並べている。)

A152
R 157

La grandeur de l'homme

La grandeur de l'homme est si visible qu'elle se tire même de sa misère car ce qui est nature aux animaux nous l'appelons misère en l'homme, par où nous reconnaissons que, sa nature étant aujourd'hui pareille à celle des animaux, il est déchu d'une meilleure nature qui lui était propre autrefois.

Car qui se trouve malheureux de n'être pas roi sinon un roi dépossédé, trouvait-on Paul Émile malheureux de n'être pas consul?¹ Au contraire, tout le monde trouvait qu'il était heureux de l'avoir été, parce que sa condition n'était pas de l'être toujours, mais on trouvait Persée si malheureux de n'être plus roi, parce que sa condition était de l'être toujours, qu'on trouvait étrange de ce qu'il supportait la vie. Qui se trouve malheureux de n'avoir qu'une bouche et qui ne se trouverait malheureux de n'avoir qu'un œil?² On ne s'est peut-être jamais avisé de s'affliger de n'avoir pas trois yeux, mais on est inconsolable de n'en point avoir.

1. Dans le manuscrit, une virgule.
2. *Idem.*

[illegible]

La grandeur de l'homme.

La grandeur de l'homme est si visible qu'elle se tire même de sa misère. Car ce qui est nature aux animaux, nous l'appelons misère en l'homme². Par où nous reconnaissons que, sa nature étant aujourd'hui pareille à celle des animaux, il est déchu d'une meilleure nature qui lui était propre autrefois.

Car qui se trouve malheureux de n'être pas roi, sinon un roi dépossédé? Trouvait-on Paul-Émile malheureux de n'être pas consul? Au contraire, tout le monde trouvait qu'il était heureux de l'avoir été, parce que sa condition n'était pas de l'être toujours. Mais on trouvait Persée si malheureux de n'être plus roi, parce que sa condition était de l'être toujours, qu'on trouvait étrange de ce qu'il supportait la vie¹. Qui se trouve malheureux de n'avoir qu'une bouche? Et qui ne se trouverait malheureux de n'avoir qu'un œil? On ne s'est peut-être jamais avisé de s'affliger de n'avoir pas trois yeux, mais on est inconsolable de n'en point avoir.

見てわかる通り、自筆の最初のパラグラフに句読点が打たれていない。そこにいくつかのフレーズを生み出す特別な、統辞論上の理由はない。(ここではセリエ版によって代表されている) 諸版によって導入された文節はリズムと文体を変えてしまっている。第二パラグラフでは、諸版は明示することなく句読点を加えているだけでなく、常に秘密裏に句読点を変えてしまってさえいる(「*dépossédé*」の後のカンマを必要もなくクエスチョンマークに置き換えている)。

この説明の締めくくりとして、簡単にいくつかの読み方の変更について言及しておこう。例えば「*embarqué*」[「船に乗っている」]の代わりに「*au carcan*」[「首かせの刑」](C.A222 [S680-L418-B233])と読む¹⁹、「*coasseur*」[「ぜいぜい喘ぎながら喋る」]の

¹⁹ 【訳註】問題となっているのは、「*Oui, mais il faut parier. Cela n'est pas volontaire, vous êtes embarqué.*」(電子版『パンセ』より)。

代わりに « asseur » [「徴税人²⁰」 C. A327 [S228-L196-B86]] と読む²¹というものだ。加えて、句読法の変化は、意味論的に大きな結果をもたらさう。例えば、C. A21 [S544-L663-B121] の終わり (« le nombre, qui les multiplie » に対する [カンチオン版の] « le nombre qui les multiplie »)²²である。同様に、次のことを言わねばならない。自筆原稿に向けられた注意はパンセの範囲の確定における変更といくつかのパンセのパラグラフの秩序における変更をもたらす。例えば有名な三つの秩序のディスクールが挙げられる (C. A424) [S339-L308-B793]。

結び

結論として、この編集上の刷新から期待される効果を、あえて予想させていただきたい。三つの効果が想像される。なぜなら、この版は『パスカルーのーパンセ』の伝統に三つの大きな変革をもたらしているからだ。

第一に、プランである。主として『パスカルーのーパンセ』に新たな読者諸兄姉が容易にアクセスできることを目指したこのプランは、それに加えてパスカルのエクリの本性そのものをより尊重した接近を可能にするだろう。それに伴い、それらの研究の刷新を促進することとなるだろう。これまで形成されてきたプランとは反対に、[カンチオン版の] プランはどちらも袋小路でしかない次の二つの方針には加わらない。行き止まりの道の一つめは著者が企てていたプラン、あるいは著者が仕事を終わることができていたなら至っていたはずのプランに近いプランを再発見しようと試みる諸版によってとられている。この道の中で迷っている編者たちは初版の付随的ディスクール（その序文と『生涯』）によって強く影響されている。彼らは、単にパスカルが（その教義がポール・ロワイヤルの周辺で理解されていたようなものとしての）キリスト教カトリックの護教論を書くという決定的な計画を抱いていたと考えているだけではない。パスカルの死後発見された紙片すべてが、何らかの形で、この計画に関わり、この計画に向けた

²⁰ 【訳註】十七世紀の辞書編纂者フルチエールによると、「asseur」とは「その年のタイユ税（人頭税）やその他の税金の課税対象を査定し、個々人の持ち物に課税し、税金を集めるために地域社会から選ばれた町あるいは村の住民。この農民は Asseur と Collecteur の役を果たすよう任命された。」

²¹ 【訳註】問題となっているのは、「Ma fantaisie me fait haïr un coasseur et un qui souffle en mangeant. La fantaisie a grand poids. Que profiterons-nous de là ? que nous suivrons ce poids à cause qu'il est naturel, non mais que nous y résisterons. »（電子版『パンセ』より）。

²² 【訳註】 « La nature recommence toujours les mêmes choses : les ans, les jours, les heures, les espaces de même. Et les nombres sont bout à bout, à la suite l'un de l'autre. Ainsi se fait une espèce d'infini et d'éternel. Ce n'est pas qu'il y ait rien de tout cela qui soit infini et éternel mais ces êtres terminés se multiplient infiniment. Ainsi il n'y a, ce me semble, que le nombre qui les multiplie qui soit infini. »（電子版『パンセ』より）。

構成の中に入っていると考えているのだ。〔行き止まりの道の〕二つめはブランシュヴィック版のものである。著者のパンセを通じて、著者の思考の論理を見出すことを目指してこの道は辿られている。ペリテキストによって説明された注意にも関わらず、この道はこれらのエクリの不安定さ、さまざまなパンセの間に永久にあり続ける空隙、そして多くの場合パンセそれぞれの内部にも存在する空隙を極めて完全に単純化することができるかのようにすることで、こうした諸点がもはやこれらのエクリを一つの総体と理解することの妨げとならないかのようにしてしまう。私が提示するプランはこれらのエクリの総体を一連の「テーマ群」に再編成する。それにより、これらのパンセを通じて一つの道をさし示しながらも、これらの起動相的発話行為の欠落と空白を知覚させるのだ。

自筆原稿と他筆原稿の間の違いに関して言えば、この違いはさまざまな種類 he 筆原稿に関する研究へ導き、写本の誤りに関する研究や、(もしかつて口述筆記が行われたと示すことができるなら)口述筆記のもとで生じた偶発的な誤りに関する研究を発展させるはずである。自筆原稿に力点をおくならば確実にパスカルに記すことのできるものとそうできないものの間の違いをよりよく理解し、評価することへと至りうる。そしてその結果、総体とみなされ、一つの著作とみなされているブレーズ・パスカルのエクリの全体に関するより思慮深く、より慎重な注釈学的ディスクリールを生み出すことへと至りうるのだ。なぜなら、この著作において、ただ自筆原稿だけが『パスカルーのーパンセ』肉筆原稿集において見出される〔パスカルのエクリ〕なのだから。同様に、他筆のパンセをパスカルとポール・ロワイヤルの他の著者たちの比較研究、さらには間違いなくパスカルの著作とみなされる『パスカルーのーパンセ』と集団著作物としての『プロヴァンシアル』の比較研究に介入させないのが適当であろう。いくつかの他筆のパンセはまた、密かに、また確実とは言えないまでも、ポール・ロワイヤルの集団著作物の一部でありうるのだ。

新たな句読法に関して言えば、それは自筆原稿に見られるものに二重の意味で忠実である。実際、単にそれが自筆原稿の句読法を復元しただけではない。さらに、その補いを可能な限り軽微なものとし、自筆原稿の句読法の全体的な控えめさを尊重することを私は選択した。したがって、初版によって追加されたいくつかの格言²³、結句、強調さ

²³ 武蔵大学での私たちの発表において、考える葦のパンセを扱った際の望月ゆか氏の助言のおかげで、この点を指摘することができた。

れた弁論のリズムは消失した。同様に、単に一フレーズが終わっていないいくつかの箇所
所で諸版によって捏造された三点リーダーを消した。そうした箇所は、明示的に継続
することが必要ではない一つの連続するものを著者が始めたことを必ずしも意味してい
るわけではない。フレーズは単に中断され、放棄され²⁴、完全に起動相的であり、加筆
修正され、完成されることになったかもしれない。しかしこうしたことは決して誰にも
知り得ないだろう。これらすべての方法によって、この新版はこれらのエクリの著しい
未完成の度合いを読むべきもの、見るべきものとして提示する。

この新版を根拠づけ、正当化するものを十分に示せたことを私たちは願っている。確
かなことは、最初、この新版は読解と研究の慣例に衝突し、ショックを与えうるとい
うことだ。終わりに、一言願いを述べさせていただきたい。この本質的な大変化が『パス
カルのーパンセ』の読解と研究の刷新の機会となるように。

(ソルボンヌ・ヌーヴェル・パリ第三大学
名誉准教授 (研究指導資格))

²⁴ [カンチオン版『パンセ』] p. 52, 58, 59, 72, 79, 184, 226, 258, 303, 304, 307, 320, 323, 354, 380, 400 を見よ。